

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（医学） 氏名 中井幸衛

学位論文題名

一般成人における抑うつに対する幼少期ストレス、気質、ライフイベントの影響：階層的重回帰分析による検討
(The influence of childhood abuse, adult stressful life events and temperaments on depressive symptoms in the nonclinical general adult population: Consideration by the Hierarchical Multiple Regression Analysis)

【背景と目的】

我が国の平成26年の患者調査の結果によると、うつ病などの気分障害で医療機関を受診している総患者数は、112万2千人と調査を開始して以来過去最多となった。うつ病が原因で自殺または罹患による経済損失は約2.7兆円にもものぼるという結果も出ており、大きな社会問題である。

うつ病は多因子により発症し、遺伝、環境、人格要因などの発症への関与が指摘されている。近年、我々の研究グループはTemperament Evaluation of the Memphis, Pisa, Paris, and San Diego auto-questionnaire version (TEMPS-A)によって評価された5つの感情気質のうち4気質(抑うつ、循環、焦燥、不安)が、一般成人における小児期虐待の抑うつ症状に対する効果の強力な媒介因子であることを共分散構造方程式による解析で示した。これら4気質は成人期抑うつ症状と過去1年間の否定的ライフイベントの評価を直接予測した。過去1年間の否定的ライフイベントの評価は有意だが軽度に抑うつ症状に影響していた。しかし、これらの媒介作用に加えて、抑うつ症状を増強あるいは抑制する調整効果についても検討する必要がある。うつ病あるいは抑うつ症状に対する遺伝と小児期および成人期のストレスの交互作用、あるいは人格要因と成人期のストレスの交互作用は研究されているが、それ以外の要因同士の交互作用についてはこれまで研究されていない。本研究は、感情気質、小児期虐待、成人期の過去1年間のライフイベントが互いに交互作用して、一般成人の抑うつ症状に影響するという仮説を立てて検証した。

【方法と結果】

一般募集し同意が得られた成人302名を対象として自記式質問紙で調査を実施した。有効回答数は286名であった。使用した質問紙は、①Patient Health Questionnaire-9(PHQ-9):うつ病尺度、②Life Experiences Survey(LES):過去1年間のライフイベントに対する評価、③Temperament Evaluation of the Memphis, Pisa, Paris, and San Diego Autoquestionnaire(TEMPS-A):感情気質尺度、④Child Abuse and Trauma Scale(CATS):小児期の虐待的養育環境を測定する尺度、の4つの質問紙を実施した。これらの変数の抑うつ症状に対する交互作用を調べるために、階層的重回帰分析をおこなった。

感情気質と小児期ストレスの交互作用の解析では、抑うつ気質と発揚気質は小児期ストレスによる抑うつ症状増加作用をそれぞれ増強、減弱していた。否定的なライフイベントと感情気質の交互作用の解析では、焦燥気質と発揚気質は否定的なライフイベントによる抑うつ症状増加作用をそれぞれ増強、減弱していた。抑うつ気質と焦燥気質は単独でも抑うつ症状に影響していたが、発揚気質自体は調整効果のみ有意で、抑うつ症状に対する単独の効果を示さなかった。

肯定的なライフイベントと感情気質の交互作用の解析では、循環気質と不安気質抑うつ症状増加作用を減弱す

る調整効果を肯定的なライフイベントは示していたが、肯定的なライフイベントは抑うつ症状に対する単独の効果を示さなかった。

小児期ストレスと否定的なライフイベントの交互作用の解析では、否定的なライフイベントによる抑うつ症状増加作用を小児期ストレス（CATS の合計点、ネグレクト、罰）は増強していた。小児期ストレスと肯定的なライフイベントの交互作用は有意ではなかった。

【考察】

本研究は感情気質が小児期虐待、否定的あるいは肯定的なライフイベントと交互作用し、一般成人の抑うつ症状に影響することを示した最初の報告である。

抑うつ気質、不安気質は小児期虐待の抑うつ症状に対する効果を増強し、焦燥気質は否定的なライフイベントの抑うつ症状に対する効果を増強していた。すなわちこれらの感情気質はストレスに対する脆弱性を示し、より抑うつ症状を惹起しやすい人格要因であるといえる。一方、発揚気質は、小児期虐待と否定的なライフイベントの抑うつ症状増加効果に対して拮抗的に作用することから、ストレスに対する抵抗性を示し、より抑うつ症状を惹起しにくい人格要因であるといえる。すでに神経症的傾向がうつ病の脆弱因子であることが報告されているが、本研究はうつ病の脆弱因子だけでなく抵抗因子となる感情気質を見いだしたことは臨床的にも非常に重要である。

さらに、小児期虐待と成人期否定的なライフイベントの正の交互作用が本研究では認められ、両者は抑うつ症状出現を増強していた。すなわち、小児期虐待、特にネグレクトの既往のある対象者では、成人期ストレスが加わるとうつになりやすいということを示している。ありがちな交互作用であるが、これまで統計学的に証明されたことはなかった。加えて、肯定的なライフイベントが循環気質と不安気質を有する対象者で抑うつ症状に対して負の調整効果を示したことも臨床的に重要であり、これらの気質を有する患者では肯定的な体験をすることがうつ症状改善に寄与することが示唆される。

本研究でえられた知見はこれまでの心理療法の理論的な機序を説明するとともに、新たな心理療法の開発につながり、うつ病の治療向上に貢献することが期待される。

【結論】

発揚気質自体は抑うつ症状には影響しなかったが、幼少期ストレスや成人期ストレスによる抑うつ症状増強を発揚気質は緩和した。

抑うつ気質と焦燥気質は、幼少期ストレスや成人期ストレスによる抑うつ症状増強を、それぞれさらに増強した。抑うつ気質と焦燥気質は個体の脆弱性と関連し、発揚気質は個体のレジリエンスと関連している可能性が示唆された。

ポジティブなライフイベントは抑うつ症状を低下させた。